

九十九里郷土研究会 郷土研通信

第 9 号	
会長	内山 いつ
事務局	局長 松 英一 村 松
事務所	町 5 の 5 九里生 6 4 7 8 十荒 1 0 0 中 4 0 0 田 1 0 0 電 話 7 6 1
会員数	5 7 名
平成 3 0 年 8 月 1 0 日	現在
設立	平成 2 2 年 4 月 1 7 日

大盛況にて終わる！

七月の「特別講演会」

七月二十一日（土）に九十九里町及び町教育委員会の後援、さらに町商工会、町観光協会、町社会福祉協議会、町婦人会、町文化団体連絡協議会、町ダイヤモンドクラブ連合会の協賛を頂いて開催した「特別講演会」（講師元県立東金高校校長、現大網白里市郷土史研究会会長・古山豊氏）は、町内外から二百二十余人の参加を頂き、「大盛況」にて終えることが出来ました。

演題が「かつて九十九里にも米軍基地があった！なぜ米軍高射砲演習場が豊海に設置されたか」ということで、戦後間もない地元の内容であり、当時においては「負の実態」が

大勢の方々の参加に感謝

会長 内山 いつ

今年、例年になく暑さの厳しい夏を迎えております。本日の「特別講演会」の開催に当たり、大矢町長様、佐々木副町長様、町協議会議長の浅岡様、町教育長の中村様を始め、協賛団体の会長様のご出席を頂き、厚くお礼申し上げます。特に町当局、町教育委員会に

大きかっただけに、先人たちの労苦を後世に語り継ごうという目的で開催されました。お陰様で予想を大きく上回る、いわゆる「想定外」の参加者を得ることが出来ました。後援・協賛、そして、ご出席頂いた方々に厚くお礼申し上げます。

は多大なご支援を頂きました。この場をお借りして感謝を申し上げます。また、本講演会の講師をお引き受け下さいました古山豊先生に厚くお礼申し上げます。そして、大変遅くなりましたが、会場一杯にご出席頂きました皆様、本当にありがとうございました。このような対外的に大きな会を開催しますのは、本会にとつて初めてのことであり、何かと配慮に欠け、失礼な面もあろうかと思いますが、温かなお心を賜りまして、ご容赦頂ければ幸いに存じます。

さて、昭和二十三年四月より三十二年十月までの十年間、本町の豊海地区に米軍基地が置かれ、騒音の被害、漁業の被害、震動被害、米兵による交通事故・人命事故、無人機の落下事故、青少年の風紀の乱れ・喫煙、長欠児童生徒の増加、そして、「パンパン」と呼ばれる若い女の子がうろつき、「ヒロポン」という覚醒剤までが広まるなど、多大な被害を被りました。

しかし、年々、この時代を生き抜いた人々が減少し、次第にこの「負の実態」が忘れ去られ、風化されつつあります。そこで、米軍基地の実態について、この基地を深く研究されています古山先生にご講演の労を頂くことにしました。

この講演を通して、先人たちのご苦労を知り、再びこのような「苦難の日々」が起こることがないように切に願ひ、誠に雑ばくではございますが、来賓の方々、ご列席の皆様方に万感の感謝を込めまして、会長あいさつとさせていただきます。

△講演会当日の「会長あいさつ」を採録▽

古山豊先生の講演をもう一度！

七月二十一日の講演「かつて九十九里にも米軍基地があった」をDVDにて販売中 一枚一〇〇〇円（税込）



主催者あいさつをする内山会長



来賓あいさつをする町長大矢吉明様



会場一杯に集まった参加者

参加者の声

歴史を引き継ぐ重みを考える

石渡 延男 (長生村郷土史研究会)

七月二十一日、九十九里町中央公民館で開催された講演会は、充実したものであった。講師古山氏のお話を聞くのは二度目であるが、今回は、特に力のこもったものであった。古山氏が「この地でやりたかった」と述べた言葉に理由があった。講演の中心をなす米軍基地は、講演の地九十九里町にあったからである。

講演の前半は、副題「なぜ米軍高射砲演習場が豊海に設置されたか」の通りに進められた。その理由を追い求めてアメリカにまで足を伸ばし、加藤陽子東京大学教授(日本近代史)の協力を得て解き明かしているのは驚いた。お蔭で豊海の米軍基地は、朝鮮戦争に連動していることが理解できた。豊海の住民から見れば、利害関係もない不本意な苦境は、世界情勢と密接に結びついて生じたものだったのである。



古山豊氏は、その研究を映像化し、参加者にわかりやすく説明してくれた。むずかしい話をむずかしく話するのは容易なことであるが、むずかしい話をやさしく話すのは熟達した人でなければできません。古山先生が子ども目線から発想する教育者であった賜物です。後半は、米軍基地と住民が被った基地被害の話であったが多少、物足りなさを感じた。風紀の乱れやヒロポン薬禍、人身売買、騒音問題、米兵の犯罪、漁業損害と補償運動、基地

お母さんの昔話

長谷川 ヌイ

お母さんの小さい頃、住んでいた真亀の地に、米軍基地があつてね、日本が戦争に負けて、アメリカ兵が、いっぱい来たの。

「赤トンボ」と呼ばれた、リモコンで飛ぶ無人飛行機が、海の上をぐるりと廻り、それに向かつて、高射砲が打たれるの。「ドカーン、ドカーン」と、すごい音がして、近くに住む人は、棚のものが落ちたり、ガラス窓がビビーンとなつて、随分うるさかつたそうよ。

アメリカ兵は、始めはテントでのキャンプでした。大きなトラックが何十台もゴーゴーと来て、いろいろな物が運んでいました。その頃(昭和二十三年)、アイオン台風という大きな台風が来て、兵隊さん、とても怖い思いをしたようです。夜中にゴーゴーとトラックに乗り、どこかへ逃げて行きました。

それから、カマボコ兵舎が建てられて、相変わらず、ドカーンは打たれていました。この国有地に建てられたキャンプ(みんな、そう呼んでいた)は、とても怖い所だった。鉄条網が張られて、MPという兵隊が、ライフルを背に見廻りをしているの。

反対運動など、項目は挙げられていたが、今一つ具体性が乏しかつた。古山氏は、聞き取りや実地調査をやっているはずであるから、恐らく講演時間が不足した性なのだろう。今回の講演目的には、基地被害の語り継ぎがあつたと思う。何を次世代に語り継ぐかを考えるためにも、惜しまれることであつた。

かつて『基地の子』(光文社、一九五四年)という書籍があつて、豊海の子八人の作文が載っている。子どもの目を通して時代をどう見たかがよくわかる。今回の講演会場で、「パンパン親子」、「小さな弟の死」を書いた内山さんと今関(小澤)さんにお会いできたのが幸いであつた。「五歳で米軍トラックの下敷きになって死んだ弟は、生きていれば七十歳です」という言葉が、今でも心に残っている。

でも、年に一回、クリスマスのは、子供だけ中に入ることが出来て、広い講堂のような所で、キャラメルやチョコレートのプレゼントが貰えるの。お母さんも子供の頃、一回だけ中に入ったけれど、お菓子は貰わなかつた……。子供心に、戦死した父ちゃんや敵という思いがあつたからでしょう。兵隊でも、位の高い人は、民家を借りて、家族と住んでいて、クリ毛の三兄弟が、その頃、珍しい子供用の自転車を乗り回していました。

基地での演習は、午前十時頃から午後三時過ぎで、海に向かつてドカーンが打たれるの。でも、土曜日は午前中だけ、日曜日は休みになるの。海の漁は、めつきり減つたけれど、地曳網は出来たの。時々、この網に大きな落下傘がかかることがある、無人機に高射砲が当たると、落下傘が開き、地上に降ります。大抵、広い砂浜に落ち、すぐに米軍のジープが来て、持っていくの。たまに海に落ちたのが、地曳網にかかることもあつたのね。

ところが、お母さんが五年生の時に、この赤トンボが、近くの町営住宅に墜落、炎上したの。死傷者が出て、焼き出された人は、近くの山にテントを張つて、暮らしていました。

お母さんは、なぜアメリカ兵がいばつていいのか、いやでたまりませんでした。だれもそうだったのでしょう。だから、夜道を歩く人も少なく、戸締まりも念入りにしたの。お母さんが中学校を卒業しても、また、米軍はいました。校舎は、防音装置もしてあつたけれど、ドカーンは相変わらず打たれ、海は不漁でした。でも、基地で働いていた人は、高い給料を貰っているようでした。

その基地も、昭和三十二年には無くなり、真亀は、静かになつたのです。(筆者は内山会長の妹さん。結婚前まで、真亀に居住。基地があつた時代の体験をお子さんに語り続け、そのお子さんも、現在、四十七歳、四十五歳、四十三歳。それぞれ家族を持ち、子育て中とのこと)

米軍真亀基地のこと

川島 秀臣（本会顧問）

豊海町（九十九里町）真亀海岸が米軍基地とされたのは、昭和二十三年四月のことであった。この土地が基地とされたのは偶然ではなかった。終戦間際、米軍は東京制圧を狙って関東地方に上陸作戦を企画していたが、その第一候補地が九十九里浜の片貝付近であったから、その周辺の様子は細密に調査していた。高射砲基地としては、東京にも近いし、格好の場所であったのであろう。

真亀海岸には、昭和九年、高村光太郎の妻智恵子が妹夫婦と母親が居住していた関係から、精神病療養のために静養していた。光太郎の智恵子宛のハガキに「真亀といふところが大変よいところなので安心しました。何といふ美しい松林でせう。あの松の間から来るきれいな空気を吸ふとどんな病気でもなほつてしまひませう。そしておいしい新しい食物。よくたべてよく休んでください。智恵さん、智恵さん」。

光太郎が絶賛した文字通り白砂青松の真亀海岸は、「日本人立入禁止」の立て札の下にブルトーザーで一昼夜にして整地され、以後、昭和三十三年まで十年に渡り高射砲射撃基地として町民、特に漁民を苦しめることになる。

小生の居住地は、海岸から三キロ余り内陸の西野岡であったので、騒音その他の被害は受けなかったが、小学校入学が昭和二十二年で、中学校卒業が三十一年であったから、義務教育九年間は、ほぼ米軍の高射砲、射的となる無人機の騒音を浴びて過ごしたことになる。特に豊海中学校は、基地に近接していたから、授業も午後になると時々中断、窓ガラスが動かぬように窓枠を改造したり、窓の前にプラタナスを植えたりされたが、効果は少なかつた。革新政党政主導による基地反対運動もあったが、指導者は米軍に逮捕され、町当局も撤廃運動を見限り、漁業補償や漁港建設等を中心とする経済的支援要求を優先させる方針を取るようになる。

昭和二十六年九月、サンフランシスコ対日

語り継ぐ遺産として

鍵田 貴俊

今年六月十二日、米朝首脳による史上初の歴史的会談が行われた。南北合わせて死者五百万人にのぼったとされる朝鮮戦争が未だ実質的な終戦に至っていない中、先の大戦後の日米関係や朝鮮半島における過去の歴史を考えながら、固唾を呑んで注目したことは記憶に新しい。

それから間もない七月二十一日、古山豊氏による特別講演を聴く機会を得たことは、この平和条約が調印され、日本の独立が達成されたものの、米軍は同時に調印された日米安全保障条約により、そのまま日本に駐屯することになる。日本を守るというより、共産ソ連・中国・北朝鮮を睨むアメリカの世界戦略の一環であることは明白である。

とここで、進駐軍についての記憶はあまり残っていないが、一つだけ鮮明に覚えていることがある。中学三年の頃、校庭で米軍兵士と野球部の親善試合があった。米兵は、皆、身長、体重ともに生徒の二倍もありそうな巨漢ぞろい。これでは、戦争も、野球も、とても太刀打ち出来ぬと思った。試合が始まり、米兵がいきなりセクターオーバーの大飛球を放ち、セカンドに滑り込んだ。ところが、足を挫いたのか、起き上がれない。苦痛に歪んだ顔をして、同僚に抱えられて退く姿を見て、怪我をした兵士には悪いが、生徒たちの間に「アーンダ、デツケエだけじゃネエカー」という声と共に、奇妙な安堵感が広がった。かつて「鬼畜」と喧伝され、恐れられた米兵も、同じ人間ということが実感されたのであった。

戦後七十三年経った今、未だに沖繩はじめ各地に米軍基地が存在する。日本は独立国でありながら、米軍に守ってもらっているのだ。真亀の基地がアメリカ側の思惑で突如撤去されたように、現在の基地もアメリカ政府の都合により、存続や撤収が行われるのだろうか。独立国家として、それでいいのだろうか。

上ない幸運であった。

そして、氏の講演は、米軍の高射砲演習基地である「キャンプ片貝」と「朝鮮戦争」には、実は密接な関係があったことを知る機会となった。つまり、「キャンプ片貝」は、昭和二十三年四月から十年間に亘り真亀海岸に設置されたが、昭和二十五年の朝鮮戦争勃発後は、日本駐留の数千の米兵が同基地に集められ、訓練を重ねては戦場である韓国へ向かったという。

また、講演の中で、基地の設置が地元住民に及ぼした直接的・間接的な数々の影響についても、初めてその具体的な事実を知ることとなった。

それらは、演習による爆音や震動のみならず、米軍が関係する事故、不漁に伴う貧困、風紀の乱れを始めとする社会問題など、枚挙にいとまがない。とりわけ、当時の子供たちに与えた悪影響を想うとき、その後的人生を左右する程、大きなものであったのではないかと、彼らの悲痛な叫びが脳裏をよぎる。

しかしながら、そのような時代の渦の中で、当時の豊海町々長を始め、地元諸氏が漁業補償・基地問題などの被害対策に向け、国・県への働きかけに立ち上がったことは、感動に値するものであろう。

そして、漁業補償問題を例にとれば、それら先人の努力がこれまでの漁港整備に繋がっているという事実は否めない。

さらに今、再生可能エネルギーの見直しによる九十九里沿岸沖の風力発電の可能性が検討されている中、漁港の存在が一つのセールスポイントになりうることは、私たちが歴史の延長上に生きていることを強く感じさせるものである。

だからこそ、これからも誰かが「キャンプ片貝」のことを語り継いでいくべきではないだろうか。

最後に、機会を与えて頂いた古山氏、また、講演会開催に尽力された内山会長始め九十九里郷土研究会の皆さんに、ぜひ心の「感謝状」を贈りたい。

基地の「負の遺産」を町おこしに！

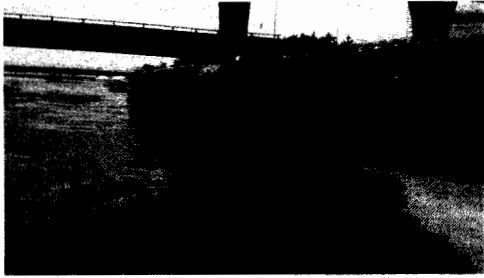
古山 豊先生（特別講演会講師）

講演当日、内山いつ会長より『郷土研通信』第九号に載せる原稿を依頼された。内容は「講演の感想」ということであつたが、この手の原稿は一番苦手であるため、勝手ながら自由な観点で書かせて頂くことをご容赦願いたい。

一・基地の残照「矢板盤」「実弾高射砲の筒」

基地が建設された年の昭和二十三年の秋、巨大なアイオン台風が基地を襲つた。当時、基地の近くに住んでいた長谷川ぬいさん（内山会長の妹さん）の話によると、「波が基地に入り込んで避難していく隊の車輛の音がゴーゴーと聞こえた」という。台風被害を期に進駐軍は川の北岸に矢板盤（現在の智恵子橋の下、長さ約八十m）を打ち込んだ。七十年前の出来事であるが、打ち込まれた矢板盤は今でも波間に姿を現している。この話を聞いたのは、当時基地でアルバイトをしていた北今泉の高梨元美氏からである。近隣の人々でさえ、その史実を知る人は殆どいない。

話は変わり、高射砲の実弾を入れた筒については、高射砲・機関砲は、一〇〇、九〇、七五ミリ等々、種類も多かつた。これら実弾を入れた筒を、以前に内山菊敏氏（九十九里町真亀）から一本いただいた。油紙が巻かれ、実に精密に作られていたので、密封性は高く、丈夫である。氏によると、海で浮き袋代わりに使っていたという。また、農家では、種籾などの保存に使われていたという。基地周辺のお宅や



岡集落の納屋などにまだ眠っているかも知れない。寄贈して頂くと「町おこし」や「平和教育」の参考資料として役立つのではないだろうか。

二・基地跡に残る「マリア像（胸像）」

講演の十日程前、内山菊敏氏から国民宿舎サンライズ九十九里の角に、マリア像があるという話を伺つた。勿論、ほとんどの人は、その存在を知らない。早速見に行つたら、草木に埋もれ、人目に付かない場所に巨大な「マリア像」（胸像）があつた。被い繁つた草木を踏み倒し、近付いてみると、存在感のある像が現れた。両手で押してみたが、びくともしない。重機でもなければとても移動は困難である。自然石を彫つたもので、荒削りであるが、目鼻立ちがよく、敬虔なる祈りが物悲しいほどに表現されている。



像がどのような経緯で施設の隅に設置されたものか定かではないが、置かれている場所から工事を持て余した末に処理されたと思えないというのが第一印象である。米軍基地との係わりがあつたとしたら、九十九里町にとつて「負の遺産」が転じて歴史遺産として陽の目をみることは必定である。何れにせよ、悲しみ嘆くマリア（像）を一日も早く草むらから救出してあげられることを願っている。九十九里郷土研究会の今後の調査研究に期待し、そして講演を通して「語り部」が一人でも増え、町の活性化につなげて頂ければ幸いです。最後に、町を挙げての特別講演会という

事務局日誌

今年の研修旅行は銚子・旭方面へ

九月十三日（木）に銚子・旭方面に出掛けました。参加者は二十名。ヒゲタ醬油工場・飯沼観音・銚子電鉄・外川ミニ資料館・屏風ヶ浦・刑部岬展望台を見学。中でも、銚子電鉄の銚子駅から外川駅までは、かつての九十九里電鉄を想い出して懐かしさに浸り、断崖絶壁の屏風ヶ浦に驚き、ウオツセで美味しい食事を堪能。「史跡見学よりお買い物に熱心」とMさん。実に有意義な一日に。



機会を設けていただいた各位に心より感謝すると共に、県下で最も意欲的活動を続けている九十九里郷土研究会の益々のご発展をご祈念申し上げます。

あとがき

何人、出席して頂けるのか？ 会長は知人などに会うと「知り合いを連れて来て！」と懇願し、人集めに奔走。その効もあり、何と文化的行事に二百二十余名という人数を集め、「人口一万六千人足らずのこの町も捨てたものではない」ということを知らしめたことは確か。実に喜ばしいこと。次は「海と文化都市九十九里町」を目指し、文化的遺産を大切にす町づくりを努めてほしいものです。

ところで、昨年度の国民宿者ランキング（全国八十九所）で「サンライズ九十九里」が第六位（利用率六十％）とのこと（関東一位）。多くの宿泊客を集めている宿、本町の誇りとしてここを基盤とした「文学碑・史跡めぐり」等に協力したいものです。（本保）